

新刊  
紹介

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth Not  
to be though expert in both.

太田雅夫編集・解説「桐生悠々反軍論集」  
(新泉社 A5判・四九四頁・二五〇〇円)

「文章報国の事業は戦争事項を以て尽されていような狭いものではなく、他にいくらでも、しかもヨリ深い、ヨリ高い意味を持つている事項が、そこらあたり転がっている」(二二一頁)

「文章は私の宗教であることを痛感した。不愉快なる時、不平なる時、悲しい時、腹立たしい時には必ず筆を執って、この感情を紙の上に反射する。すると、不思議にも、心が平静になって、一切の苦悶を忘却する」(二六二頁)

「私は言いたいことを言っているのではない。徒に言いたいことを言って、快を貪っているのではない。言わなければならな

いことを、国民として、特にこの非常に際して、しかも国家の将来に対して、真正なる愛国者の一人として、同時に人類として言わなければならないことを言っているのだ」(一〇五頁)

太田雅夫編『桐生悠々反軍論集』から引用したこの三つの文章で、私は、桐生悠々という一ジャーナリストの仕事、とくにその反軍論の展開が、終始アマチュアのそれであったと考えてみたい。

桐生悠々の一生、とくに個人雑誌「他山の石」にたてこもって反軍論を展開したその晩年を、アマチュア・ジャーナリストという点で考えるのは、おそらく常識になっている。小説の原稿をかかえて金沢から上京、尾崎紅葉に面会を求めた二〇歳のときから死に至るまで、悠々の生活は文章をもって支えられていた。小規模ではあったにせよ、雑誌「他山の石」は悠々ただ一人の才覚で発行されつづけた。数えきれぬほどの発禁命令の最後のものは、なんと悠々の死のその通夜るとき、彼の霊前につきつけられたというすさまじいジャーナリストとしての一生なのである。

にもかかわらず私は、桐生悠々アマチュア説をひるがえそうとは思わない。

引用した三つの断片のうちでも、とくに最初のものに留意するかぎり、反軍、反フアッシュヨの姿勢に徹しようとした悠々が何を犠牲にしたか、犠牲にされたものの価値が、悠々にとつていかに大きなものであったかを知らないわけにはゆかないと思う。

「言いたいこと」つまり戦争にかんずることがらよりも「ヨリ深い、ヨリ高い意味を持つている事項」がいくらでもそこらに転がっていることを知っているのに、悠々はそれをいわず「言わなければならぬこと」とつまり「戦争事項」だけに自分の主張を限定していったのである。

プロフェッショナル・ジャーナリストは、時局の非常性につき動かされて「言わなければならぬこと」をいうくらいなら、むしろ沈黙することのほうを選ぶものだ。そしてそれは愛国者という自己規定とは両立しない。

悠々は、プロフェッショナルな態度を貫くにはあまりにも愛国者でありすぎた。それゆえ「他山の石」を発行しつづけた悠々

の晩年は、滅亡に向かう大日本帝国との異質性よりは共通性を多く持たねばならなかったのである。悠々の悲劇をいうならば、このことのほかにはない。

たとえば中国問題である。信濃毎日新聞主筆時代の論説「今後の絶対必要な日支兩國の結婚」で彼はこう論じている——「この結婚は一日も早く断行しなければならぬ。そしてこれまでの一切の経緯を一の痴話喧嘩に過ぎなかったとして、夫婦ともに期に笑わなければならぬ」(一九頁)。「日支兩國の結婚」という政治的には貧しい表現の夢想にたいして明確なイメージを与えたのは、皮肉なことに軍部のいう「大東亜共栄圏」であった。

桐生悠々は、「大東亜共栄圏」の盟主たるべき日本がその実力と威信を損なうことなく、いかにしたら対中国戦という泥沼からきれいに足を引きぬけるかというところに問題の軸をおいていたように思われる。この軸に立った以上、悠々は逃げ出せなかった。逃げ出すことができなかったからこそ、彼の、あの激しい軍部攻撃もまた休むひまなくつつけられねばならなかったのだ

ある。

### ※

「他山の石」は、今日でいう「ミニ・コミ雑誌」である。太田雅夫氏が「戦時下抵抗の研究(Ⅱ)」で悠々の反軍論を紹介するまでは、戦後二十余年の現在になっても多くの人に知られた存在ではなかった。

そしていまでは、残念ながら遅すぎた!! 「他山の石」の毎号の冒頭には明治天皇の五ヶ条の誓文がかげられていた。また桐生悠々が軍部や政府を批判攻撃するときには、何度となく教育勅語や軍人勅語を武器に、單身斬りこみをかけている。それがまんざら皮肉でなかった悠々の古くささを笑つてもいい。が、憲法九条を楯に平然と笑っている現代のわれわれが、はたしていつたい永遠に新しいままでいられるであろうか。

プロフェッショナル・ジャーナリストとしての才能と経験に恵まれていた悠々であったが、彼にそれを投げ棄てさせたのは「非常時」の認識であり、さらには、自由主義者としての誇りであつたらう。「自由主義は全体主義に反するものでなく、二者

は全く別個の思想または概念であると同時に、並立し得るものである」(九九頁)という表現を一步ふみこんで読めば、自由主義を圧迫する全体主義は存続しえないという論理になり、全体主義と専制とを区別し、前者が後者に転落してゆく過程が悠々の批判の対象になっていることがわかる。

「他山の石」には「騒音雑音」「ゲリラ戦」というコラム欄が設けられていて、この「反軍論集」にも収録されている。好みをいわせてもらえば、私はこの寸評のほうがおもしろいと思う。プロフェッショナル・ジャーナリストとして、悠々が「言いたいこと」を辛うじていえたのがこのコラムではなかったかと思う。(高野澄)

### 訂正(37号)

20頁・14行目

(誤) 童山(昇) (正) 亀山(昇)

21頁・1行目

(誤) 久保(正) 久保